

「まだこれからよ、真由子」

いつの間にか全裸になった彩香が、手にした性具を真由子の鼻先に突きつけた。今まで使われた物とは違う。革紐の付いた双頭の張型だ。

「彩香さん…何、それ…怖い…」

快美に臆臆とした頭にはその用途がよく分からない。

「これね…こうするの…」

彩香は見せつける様にその一端を己の秘裂にあてがった。

「…ん…んあッ、ああ…」

顔を仰け反らせ、皓い歯をこぼしながら、グロテスクな物をズブズブと埋めて行く。それを晃が紐で腰に結えつけた。

「ねえ見て、彩香のこれ…いいでしょ…」

「いや…彩香さん、そんなのいや…」

少女のような身体の股間から肉色の巨大な男根が生えている様は、奇怪な両性具有の生き物を思わせた。彩香は激しい期待と興奮に頬を上気させ、口を半開きにして舌舐めずりをしている。

彩香がベッドに昇ってきた。晃が真由子の腰を押さえつける。

「いやよ、彩香さん…いやあ…」

「真由子…」

「あッ、駄目…ひ…ひいいッ」

ヌルヌルと張型が入って来る。手で操られるのとは違う。身体の重みを伴った侵入に真由子の口から掠れる様な声が漏れた。

「うんッ…うむ…彩香さん…」

根元まで埋め込まれ、真由子はその圧迫感に呻吟する。

「真由子…真由子…好き…」

彩香がゆっくりと抽送を始めた。

「ひいいッ、動かないで…駄目…駄目え…」